

Shoichi Ida

大野綾子

Ayako Ohno

加藤巧

Takumi Kato

土方大

Dai Hihikata

ミルク倉庫 + ココナッツ

mirksouko + The Coconut

2019.4.24 WED > 6.23 SUN
京都大学総合博物館

The Kyoto University Museum

開館時間：9:30-16:30 入館は16時まで
休館日：月曜日、火曜日—平日・祝日にかかわらず
観覧料：一般 400円／高校生・大学生 300円／小学生・中学生 200円
—20名以上の場合は団体観覧料を適応
—障害者手帳をお持ちの方とその付き添いの方1名、70歳以上の方は無料（要証明）
—京都大学学生・教職員、京都府下の大学在籍の学生は無料（要証明）

タイムライン

TIMELINE: Multiple measures to touch time

<http://www.artandarchive.com/timeline/>



井田照一 〈Tantra〉1962-2006年 322×212 mm より No. 385 (2005年) 豊田市美術館所蔵

井田照一

1941年京都府生まれ。1965年、京都市立美術大学 入学。京都市立美術大学 卒業。

西洋画科修了。1968年毎日フランス留学コンクールで大賞を受賞し、パリに留学。1970年から74年にかけてはニューヨークに滞在し、各国で個展を開催するとともに、東京国際版画展・エンターレ展、パリ国際版画展・エンターレ展、ルウヴール国際版画展・エンターレ展などに出品。帰国後も世界各地の版画展に出品し国際的に活躍。イメージそのイメージが描かれる場の接点である「表面」に着目し、「Surface is the Between—表面は間である」というコンセプトを掲げた上で、様々な版画技法を駆使し数多くの作品を制作し「表と裏」の両義性を、色やかたちといった造形要素により表現しようと試み続けた。1986年、日米文化交流名誉賞をロバート・ラウシェンバークと共に受賞。1989年、サントリー美術館大賞展大賞を受賞。2004年、紫綬褒章を受章。2006年、65歳で歿。



井田照一 〈Tantra〉 No. 385
2005
322×212 mm
豊田市美術館所蔵

加藤巧

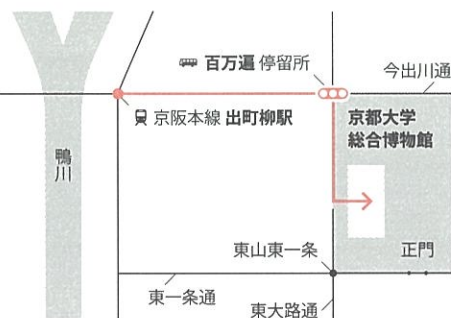
1984年愛知県生まれ。1984年愛知県立美術学校 卒業。15世紀の絵画技法家・チェンイーノ・チェンイーノの研究を起点とし、現代につながる材料/メディアの歴史を紐解きながら絵画材料研究と絵画制作を並行している。代表的な発表として「World Event Young Artists」(2012)、「東京国際版画展」(2015)、「東京国際版画展」(2016)、「東京国際版画展」(2017)などがある。

二の『絵画術の書』の研究を起点とし、現代につながる材料/メディアの歴史を紐解きながら絵画材料研究と絵画制作を並行している。代表的な発表として「World Event Young Artists」(2012)、「東京国際版画展」(2015)、「東京国際版画展」(2016)、「東京国際版画展」(2017)などがある。



加藤巧 〈To Rub #3〉
2018 440×364 mm
顔料、アルデヒド樹脂、白亜地、亜麻布、木材

入館は16時まで
休館日：月曜日、火曜日
平日・祝日にかかわらず



design kumagatorasshi



大野綾子

Ayako Ohno

1983年埼玉県生まれ。彫刻家。日常の風景や行為からのイメージなど、人々の生活に潜むあらゆる事象を形におこしている。思い描くイメージと石という物質との調和とバランスを考慮し、独特の「かたち」を獲得していく中で、現代における石の彫刻のあり方を模索している。「第7回大黒屋現代アート公募展」大賞受賞(2012)、「個展」『さかなくとして浸かる』(2013)／板室温泉大黒屋／板木愚、開催。近年は個展『さかなくのような人』(2018)／KAYOKOYUKI／東京都、「所沢ビエンナーレ」引込線」(2017) (2017)／旧所沢市立第2中学校食センター(埼玉)などがある。



大野綾子 〈さかなくのような人〉
2018
3270×5080×2900 mm
大理石、木、アルミ、他



ミルク倉庫+ココナッツ 〈cranky wordy things〉
2017
モニタ、絆、紙袋、豆、ピスタチオ、フラスコ、木箱、モータ、ペットボトル、ポリタンク、他

ミルク倉庫+ココナッツ

7人の異なった職能(電気設備、造園などの土木系技術や、建築デザインなど)を複合体として組み込んだアーティファクト。人間とモノ、あるいはそれらと技術の関係に可塑性を見出し、社会へ新たな思弁性を与える技術開発や実験などを制作として行う。代表的な発表として「アートプログラム青梅—存在を超えて」(2012)／東京都、「無条件修復 UNCONDITIONAL RESTORATION」(2015)／東京都／企画展「家計簿は火の車」(2016)／3331 GALLERY／東京都、「漂流の国を、芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017—身体(のまへん)」(2017)／岐阜県美術館／岐阜県などがある。

TIMELINE: 2019.4.24 WED > 6.23 SUN
Multiple measures to touch time
9:30 — 16:30

会期中の展示替えについて：
5月22日より、井田照一作品(豊田市美術館所蔵)を展示替え。

京都大学総合博物館
The Kyoto University Museum
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
Tel. 075 753 3272
info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/

主催：京都大学総合博物館 共催：京都大学人間・環境学研究所、東海大学 創造科学技術研究機構 後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会 企画：タイムライン実行委員会 協力：イダショウウイスタジオ、KAYOKOYUKI、豊田市美術館、株式会社ニコンインストック、東山アーティスト・プレイメント・サービス (HAPS)、株式会社 堀場テクノサービス、森絵画保存修復工房 助成：公益財団法人花王芸術・科学財団、公益財団法人朝日新聞文化財団

TIMELINE: Multiple measures to touch time

私たちは、「時間」とさまざまな形で関わりながら、生活をしています。私たちが生まれ、成長し、老いて、やがて死んでいくことを考えれば、流れている時間と無関係でいられるひとはいないでしょう。

芸術作品の誕生と喪失は、しばしば生き物の命のありようと重ねて語られてきました。作品は「生まれ」、時に「成長」「成熟」し、やがて「老い」て「死ぬ」のだ、と言うように。しかし、私たちは、ふと立ち止まり、考えはしないでしょうか。はたして、芸術作品の生は、人間の命と同じような軌道を描いているものかと言いつけるのか、と。

近現代になって美術の世界に訪れた素材と技法の多様化は、芸術作品の生をありとあらゆる形に変容させてきました。プラスチック、ポリエステル、瓶や缶、ビデオやテレビ、みるみるうちに溶けたり消えたりしてしまう^{エフェメラル}短命な素材たち、あるいは時を超えて再び現れ新たに見出された伝統的な絵画の材料。複合的な作品の成り立ちを指す語としてよく私たちが耳にする「ミクストメディア」や「インターメディア」は、今やすっかり広く世に知られるようになりました。しかし、実際にそこでどんな「モノたち」が^{ミクスト}混交され、作品が何と何の間を^{インテラ}ゆらゆらと移ろっているのか、結果として作品の命のありようがあるいはその「寿命」がどのように複雑化したのか、その答えは、まだ宙を漂っているのです。

現代に生きる私たちが、「モノ」としての、つまり、物理的な姿形を持ち、この世の中にあって、時間の経過とともに何らかの変質が内外に生じる、変わりゆく存在としての芸術作品がたどる生の過程を浮き彫りにすることはできないのか？そこには何が見えてくるのか？「モノ」と私たちの生死の軌道は、いかに異なり、いかに交わり、あるいは遠ざかるのか？——このような問いから、「タイムライン 時間に触れるためのいくつかの方法」展は生まれました。

本展覧会は、芸術作品を作ること、示すこと、残すことに直接かかわり、その全てに考えをめぐらす者たち——^{アーティスト}制作者・^{インストーラー}展示者・^{コンサーター}修復士・^{アート・ヒストリアン}美術史家が、私たちと芸術作品の時間と生について、共に考える場となっています。作品を生み、それを公の場において、保存し、研究する彼らは、それぞれに異なった職能を持ちながら、それぞれの立場から芸術に真に向かい立ち向かい、作品というモノに「触れている」という点で、軌を一にしています。いかに形にするのか、いかに残すのか、何が残るのか、何を消滅させるのか。試行錯誤を繰り返しながら、彼らの思考は、時の流れの中でモノとモノ以外の間を絶え間なく行き来しては、新たな方向へと導かれていきます。

彼らがつくった、修復した、保存した、分析した、考え続けた作品の生の在り方を博物館の空間によりわかりやすく目に見えるように展示するために、展覧会では、作品の科学分析結果や作者の声の聴取を作品と並べて展示します。これは、目の前の作品が一体何でできているのか、これがどのように生きて、どのように私たちの生きる時間にたどり着き、どこへ向かうのか、生の来し方行く末に、科学の聴診器をあてて、耳を澄ます試みです。「モノ」としての芸術作品が、私たちが生きる時間の中でどのように変質し続けているのか、その全容を記録し記述するための方法を検討してきた2016年からの展覧会^{タイムライン}成立過程のすべてもまた、会場で公開され、作品の生と響きあうことになります。芸術作品の生の軌道に対峙し、解剖し、解体し、つなぎ合わせる空間の狭間で、私たちはどのように「時間」と出会い直すことができるでしょうか。

「時間」がわたしたちにとって平等であるように、モノに携わること、作ること、展示すること、鑑賞すること、残すこと、それらについて考えること、その全ての機会は、あらゆる人々に対し、ひとしく開かれています。

芸術作品と私たちの内外を絶え間なく流れる時間を考えなおす時間、それはひるがえって、私たちの生を今一度問い直すための今日この日この瞬間を紡ぐ営為にも、つながっていくでしょう。

作家名：
井田照一

作品名：
Tantra

制作年：
1962-2006

寸法：
各 322×212 mm (401点組)

技法：

制作の手順は単純ではなく、作品ごとに多種多様な素材を併用している。異素材の混交により、複雑な組成になっているものも多い。全作品を通じて、油絵具、水彩絵具、鉛筆、パステル、ペンなどを用いた描画のほか、シルクスクリーン、シーヌコレ、フロッタージュ、シルクプリントなどの技法も併用されている。多様な技法が確認できる。また、井田が日常生活のなかで収集した石・砂・骨・羽・石や、画家本人の体液・爪・髪などが絵具に練りこまれたり、表面に貼りつけられたりするなど多様なコラーージュが確認でき作品によっては凹凸が顕著である。

署名：

作品によって異なるが、表や裏に和文や英文で「照一造」「照一画作造」「Ida」「Shoichi Ida」など署名あり。英文署名は、ブロック体、筆記体の両方が散見される。落款が認められる作品多数。

追記：

作品の表裏両面に、作品ごとにことなる主題、使用素材、制作年、署名などが和文や英文で入れられている。ただし、素材にかんする情報などがまったく入れられていないものもある。

